

# 桜、そして雀

遠藤宏

本誌が発行されるのは、そろそろ桜のたよりが聞かれ始めるころであろう。桜の春の趣はまた格別のものがある。もつとも、一口に桜といってもその種類は素人の想像以上に多く、開花も春とは限らず、一年中どの種類かが咲いているということである。

その桜というと、国花ともされるほど日本の代表的な花であり、従って桜に関する文章は膨大な数にのぼる。また、桜にまつわる個人的な思い出というものも誰もが多少なりとも抱いていることと思われる。そのような状況の中で今さら何を書いてもたいして意味をもたないと思えるのだが、ここに敢行したのは、万葉集に関わらせてみようという魂胆が

あるからである。但し、正統的な論文の形では、無論ない。

桜の名所というと奈良県の吉野があまりにも有名である。その吉野へは学生との研修旅行も含めて十回ほどは行っているのだが、時期が合わず、ついぞ開花期の吉野を経験したことがない。誠に残念至極で、行くたびに、あの辺が一目千本のはずなのになどと指をくわえている次第である。吉野以外にも全国に名所は多いわけで、鮮かな印象で脳裏に残っているところも少なくないのだが、ここでは、名所ではないところの私的な桜を記してみた。先程の吉野と同じ奈良県の奈良西の京に薬師寺がある。ここ何年かのうちに東塔・西

塔が揃い、仏足石歌碑の納められていた小祠も片付けられてしまい、建築の喧騒の中に寺はあるのだが、そのような境内の正面に向けて右手に、岐阜県の某人が寄進したという一本の桜が植えられている。薄墨桜という説明板が添えられている。私が参詣した時はちょうど運よく満開であった。空は花ぐもりというにはちよつと重すぎる雲のたれ込めた曇天であった。下から見上げると、まさに薄墨色の花は曇り空の中に溶け込んだかのごとくで、それはそれでまた味わいのある姿であったのだが、それよりも私の目を惹いたのは、数十羽のメジロの群れがその一本の桜木に群がって花の蜜を吸っている光景であった。そのよ

うな数のメジロの集団を目にしたのは初めてで、そのことに驚ろいたのだが、驚ろきを通り越して一種異様な感をおぼえたのは、その鳥の群が一つの囀りもなく沈黙のまま、ひたすら花に取り着いている光景であった。私は吸い寄せられてその場に立ちつくしたまましばし自分の居所を忘れていた。

さて、右はちよつとした導入のつもりである。我が家の隣家の庭に一本の桜の老木がある。我が家が隣家より二メートルほど高い位置にある関係上、二階からその桜を眺めると、頂点を横から見ることができ、全貌を視野に収めることができる。春ことの開花の時には、それは見事な景観を呈してくれる。半面の枝は表の道路にかぶさっており、落花時には路面を花片が覆つてその上を歩かなければならないのはちよつとした心の痛みを伴う。しかも、その花びらはひとたび春風に逢えば我が家の狭い庭や二階のベランダ(と、一応いつておく)一面に時ならぬ雪化粧を施してくれる。梶井基次郎は桜の根本には屍体が埋つていると想像したが、確かに彼の幻想を首肯させる、不気味なほどの妖艶さをもっている。亡妻などは、その隣家の桜を、うちの桜と勝手に称して、桜のころには親や友人

を呼んでは自慢していたものであった。そんな隣家の桜の下を通っていた時、眼前を桜花が散る時分でもないのに落下していったのである。それは、花びらではない、一輪の桜花そのものであった。開いた花片を上に向けたまま、すーつと落下していく。花片でないことが不可解で、見上げると、メジロならぬ雀が桜をついばんでいるのであった。折角の花を無粋な雀め。

同じ年の春であつたかどうかは失念したが、同様の光景を他所でも目撃したことがある。私の本務校は櫻並木でちよつと有名なのだが、正門から体育館への道には見事な桜並木があつて、体育館で行う入学式の日まで桜が残つていてくれると、桜吹雪の中を新入生が歩くことになり、これもまた嬉しい情景になるのである。そんな入学式も過ぎた某日、桜下に偶々居合わせた私の眼の前を、またも桜の花そのものが落下していったのである。この時の雀は複数羽で、桜の花は次々に落ちてきた。無粋の上もない。この、雀が花をついばむという現象についての一文を、ふと目に止つた某新聞の囲み記事に見出した。環境悪化による食生の変化という説明が付されていたように記憶している。

桜並木の下での、雀のよる桜花のついでみに出会つた時、あまり脈絡はないのだが、万葉集の一首が念頭に浮んできたのである。

春霞流るるなへに青柳の枝くひ持ちて鶯鳴くも(巻一〇・一八二二)

この歌で枝をくわえているのは鶯であるが、正倉院蔵の御物の琵琶や刺繍などには華かな色彩の鳥が花の枝をくわえて飛んでいる図柄がしばしば見られる。その鳥は花喰鳥と称せられていて、唐土伝来のものである。万葉の一首は、花喰鳥も含めて全体を異国的情趣によつてまとめ上げられているのだが、雀との脈絡を自身でたどつてみれば、花喰鳥という一点にあつたようである。

一方は、上流階級趣味の優雅な構図である。他方は、人間に生活圏をおびやかされた鳥の追いつめられた行為である。従つて、雀を無粋と決めつけてしまふのは可哀想であるが、両者の差は大きい。

桜のころになると、花喰鳥と雀とを結び付けてしまった自身を思い出して苦笑をしている。その時が今年も近づいている。